家族危機としてのヤングケアラー
― 映画「猫と私と、もう１人のネコ」を題材に ―

栗　山　直　子

要旨　ヤングケアラーとは、家族内で親やきょうだいへの日常的なケアをしている子どもや若者のことを指す。日本では、介護や育児などの日常的な家族へのケアは、家族が担って当然のこととみなされてきた。2000年の介護保険によって導入された在宅サービスは家族の負担を軽減することを目的として設計されているが、あくまでも補完的なものであり、ケアの第一責任は家族に置かれたままである。とくに子ども・若者がその成長過程で家族ケアを担うことになった場合に、家族ケアのために学業や進学を断念せざるを得なくなる。あるいは学生生活や交友関係などの当たり前の日常生活を維持できなくなってしまう。映画「猫と私と、もう１人のネコ」を題材にして、ABC-Xモデルからヤングケアラーの直面する危機メカニズムを分析し、よりよい適応状態につながるための方策を考察する。

キーワード　ヤングケアラー、家族危機、ストレス、サポートネットワーク、ABC-Xモデル

１．はじめに

子ども・若者育成支援推進法（2024年６月改正）では、「家族の介護その他の日常生活上の世話を過度に行っていると認められる子ども・若者」をヤングケアラーとして、国や地方公共団体の支援の対象と位置付けている。現在、日本でヤングケアラーは喫緊の社会問題であり、その背景には、核家族の脆弱さや家族規範が依然として存在している。

本稿では、2024年春より公開された、ヤングケアラーと保護猫を題材にした映画「猫と私と、もう１人のネコ」(2024年公開、祝大輔監督、阿久根知昭脚本）を題材に、現代家族に生じうる家族危機のメカニズムについてABC-Xモデルを用いて分析をおこなう。

２．映画「猫と私と、もう１人のネコ」について

(1) 登場人物

この作品に実際に登場する人物は、清瀬紘一（父)、環（母)、櫻（娘)、捨て猫のリリを通じて会話するようになった近所の小学生のみな、櫻が通う高校の美術部のメンバーの陽葵、カトキチ、顧問の水野紗栄子、保護猫施設の施設長坂上友子、スタッフの園田、スタッフの春子、医師、看護師、後輩女子などである。そのほかSNS上で交流する人物としてジョン、すー、スンタ、ちい、にー太郎、ぶちょーなどがいる。

(2) あらすじ

この映画は、主人公で女子高生の清瀬櫻を中心に展開する。高校３年生の清瀬櫻は東京の美術大学への進学を希望している。母の環は雑誌の編集の仕事をしている。環は娘の櫻に依存的なところがあり、櫻が東京の美術大学に進学することには反対している。父の紘一は、事業に失敗し、期間従業員として単身赴任中であったが、親のあとを継ぎ徳之島で農業をすることになった。また事業の失敗によって借金を抱えており、そのこともあって環とは離婚していた。環は、家族は一緒にいなければ、とりわけ櫻とは一緒にいたいという思いが強く、紘一とは離婚しているが形式的な離婚ととらえており、家族で徳之島に移住することを考えていた。

ある日夕飯の最中に、紘一と櫻の進学のことで言い合いになる。環は、家族一緒に徳之島に移住しようといったところ、紘一は櫻の進学について櫻の希望を優先するべきと発言する。そのことで夫婦は対立し、環は紘一を家から追い出してしまう。紘一は家を出て櫻とも音信不通になる。環と櫻の母子での生活が始まったところで、環は仕事中に脳梗塞を発症し、倒れてしまう。病院から櫻に電話があり、櫻のヤングケアラーとしての生活が始まる。櫻は

美大に行きたいという希望を持ちつつも、母の環は脳梗塞で麻痺が残り、介護を必要とするため、１人で東京に行くことが難しくなってしまう。父の紘一ともあれ以来連絡がつかなくなっている。こうしたなか、櫻はSNSを通じて自分の気持ちを発信しはじめる。SNSを通じた友人とのネットワーク、捨て猫リリと近所の小学生との出会い、保護猫施設のスタッフなどとの交流を交えて物語は展開していく。

(3) 分析方法

映画「猫と私と、もう１人のネコ」を文字おこしし、環と櫻の発話のみを抽出し、エクセルを用い、発言に通し番号を付与した。文章データは櫻と環の発話で約1300文になった。その後、発話者ごとに語りを分け、環と櫻の語りからそれぞれの危機認識を分析した。これは家族危機の認識が家族成員間で異なることを示すためである。語りの文章の使用に関しては「」で示し、そのあとの（　）の数字は通し番号である。

３．清瀬家の家族危機を二重ABC-Xモデルで読み解く

家族危機とは、それぞれの家族が、これまでに営んできた家族生活を維持できなくなるような状況に突然さらされることを指す。家族の危機の発生メカニズムについてHillはABC-Xモデルを提唱した（Hill, 1958）

ABC－モデルでは、A家族危機を生じさせる要因（Stressor）、B家族危機に対応するために用いられる家族の持つ既存資源（Existing resources）、C危機に対する認識（Perception of A）という３つの相互作用の結果として、X危機（Crisis）が生じるととらえる。図式にすると下記のとおりである。これをABC-X原型とする。

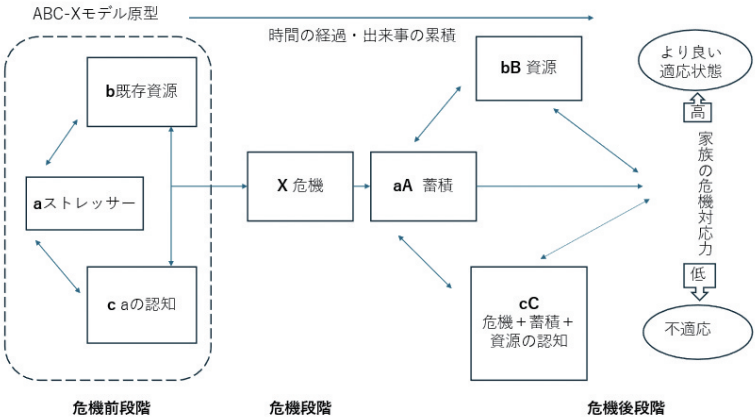
A：ストレッサー＋B：既存資源＋C：ストレッサーの認知＝X：危機

A：ストレッサーの発生時期や期間、状況は個別であり、またストレッサーへの対応も個人、家族間で異なり、B：既存資源の有無、それらの量や質も個別性が高い。C：ストレッサーの認知は家族成員それぞれ危機の認識、意

味づけの過程ともに異なっている。したがって、それらがさまざまに相互作用することで、生じる結果としての危機X：危機は大きく異なってくる。

ヒルのABC-Xモデル原型は平面的で、時間の経過の概念やそれに伴う変化、資源、意味づけなどの変数の概念が抜け落ちていた。その後、ヒルのABC-Xモデル原型を引き継ぐかたちで、McCubbin and Patterson（1981）は二重ABC-Xモデルを提唱した。二重ABC-Xモデルでは、危機の前段階－危機－危機発動後の３段階に分け、時間軸の概念を加えた。マッカバンは１つの危機は発生して終わりになるのではなく、当時の危機を累積しつつ、つぎの状況へと変化していくととらえた。そして最終的には、よりよい適合に至る場合もあれば、不適応の状況に至る場合もあることを視覚的にとらえようとした。マッカバンの二重ABC-Xモデルに映画を当てはめて作成したのが下記の図である。

図１　二重ABC-Xモデル



出典：McCubbin and Patterson（1981）をもとに栗山が加筆。

上記のマッカバンの二重ABC-Xモデルを援用して、清瀬家の家族危機を分析する。

１）危機前段階

a：ストレッサー　a．は、①紘一の会社の倒産、②両親の離婚、③環の発病、④櫻の進学の問題などがこれにあたる。

ｂ：既存資源　ｂ．は、ａのストレッサーに対抗するための資源である。櫻とともに環の介護を担う人材のことであり、両親の離婚によって紘一が同居家族から離脱したため、極端に乏しいことがわかる。

資源には、①個人・家族のもつ資源、②ソーシャルサポートネットワークがある。①個人・家族のもつ資源として、個人のもつ資源には、個人の健康状態、体力、気力、知識、経験、認識能力などが含まれる。家族のもつ資源には、家族成員間の関係性、相互扶助力、管理能力、組織力、凝集力、家族の価値観などが含まれる。②ソーシャルサポートネットワークには、(1)フォーマルサポートネットワークと(2)インフォーマルサポートネットワークがある。(1)フォーマルサポートネットワークには、行政や専門職などの福祉・医療サービスなどがある。(2)インフォーマルサポートネットワークには、インフォーマルサポートネットワークは、友人、コミュニティの住民、ボランティアなどであり、困ったときに支援してくれるインフォーマルな人的資源をどのくらい有しているかが重要となる。

そもそも核家族は社会単位として最小であり、人的資源の面からみて極めて脆弱である。家族危機に対応する資源として、インフォーマルサポートネットワークの有無は非常に重要である。

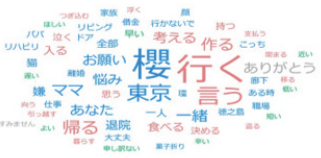
作中から、環の介護にあたっているのは主に櫻のみであることがわかる。環が脳梗塞を発病したとき、紘一は同一世帯人でなく、行方知れずで連絡もつかなくなっているため、紘一のサポートは得られない。環は中学生のときに事故で両親を亡くしており、父方の祖父母は徳之島で農家をしている。親戚などが近所にいて日常的にサポートを得られる状況ではない。環は職場の人間関係はあっても、職場の人間関係は仕事を通じた役割関係で成り立っているため、インフォーマルサポートにはなりにくい。よって清瀬家はインフォーマルサポートネットワークをほとんど有していないことがわかる。

ｃ：ストレッサーの認知　ｃ．ストレッサーの認知に関しては、自分や家族の抱えているストレッサーを認識しているか、その意味付け、ストレッサーに対して対抗しうる資源をどれだけ有しているか、その資源を認識できているかなどである。環は医師から病名を知らされ、のちにリハビリをおこなうなど自分の病気の認知と回復に向けた努力をし始める。

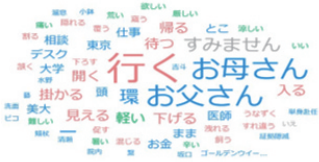
ストレッサーの認知、ストレッサー深刻さの濃淡などは家族成員間で異なる。環の認知と櫻の認知に分けて考察していく。

環と櫻の発言から見る関心ごとのワードクラウド分析
(AIデータマイニングbyユーザーローカル)

環（母）



櫻（娘）



１）環のストレッサー認知　環のストレッサーとしては、①娘の親離れへの恐怖、②孤独への恐怖、③職場復帰できるかの不安の３点があるだろう。まず①娘の親離れへの恐怖に関して、環の発言では、「美大に行って何をするの？」(156)、「私が勧めた女子大にしなさいよ。あそこはうちから近いし櫻に向いてるしさ」(158)、「美大ってどこ行きたいの？」(160)、「美大に行くだなんていうからびっくりした。しかも東京だなんていうからさ」(162)、「東京行きたいとかあるんだ」(166)、「行きたいも何もさぁ、櫻一人で東京なんて絶対無理よ。私が一から十まで全部決めてあげないと…」(168)、「まだ東京の美大進学とか考えてんの？」(788) など、環は櫻が遠く離れた東京に進学することに反対している。

また、娘への精神的依存度も高く、「先生にも、もう退院するって言った」(698)、「櫻が家に一人でいるって思ったら、たまらないのよ」(700) と早く退院して娘と一緒にいようとする。「ママが、いなくても大丈夫になったらどうしようってね…」(702) と自分から離れてしまうことに対して恐怖を抱いている。

つぎに②孤独への恐怖では、「櫻、みんなでパパの実家に引っ越さない？」(294)、「櫻を一人置いていけないでしょ。櫻も行く。」(304)、「家族は離れたらダメよ」(307)、「家族は一緒にいないと」(309) と自分の仕事をリモートワークに切り替えてでも、家族で徳之島に一緒に行こうと主張する。

そして櫻にも一緒に徳之島に行くように説得し始める。紘一が櫻には櫻の進路希望があるのだからと説諭しようとすると、環は激高し、「もうここには来ないで」(333)、「今、この家にいない人が言うんですか？」(335)、「これから櫻に連絡したら、警察呼ぶから」(337) と言い、紘一を家から追い出してしまう。環はその後の発言でも「行かないで」(799, 917, 921, 923, 929)、「いやだ」(934, 936)、「お願い」(941)、「お願い、一人にしないで」(943)、「お願いだから早く帰ってきて」(1085, 1135) などの文言が多く一人になることに恐怖感を抱いている。

③職場復帰への不安に関しては、職場の人が見舞いにやってくると彼らが帰った後に環は櫻に次のように言う。「確認に来ただけでしょ……（自分が）使い物にならないことを」(905)、「わかってるの、あっち側（職場側）にいたことあるから」(909)、「癌で休職してた人を上司と一緒に見舞いに行った。菓子折り持ってね」(911)。これらの発言から自分は脳梗塞を起こした直後は言語障害や認知障害、麻痺がでていることもあり、自分が職場で使い物にならないことで職場から切り捨てられるのではないかという不安を抱いていることがわかる。

また、環は櫻に頼んで職場に挨拶に行く場面がある。職場で倒れたことで迷惑をかけたスタッフへの挨拶という意味合いと、自分が発病した後、職場がまわっているのか、ひいては自分は職場に復帰できるのかが心配で職場に行ったと考えられる。環が職場に復帰できるかできないかは職場が判断する事柄であり、職場復帰の見通しは立っていない。

２）櫻のストレッサー認知

櫻のストレッサーは主に①環の介護、②進学の問題、③サポートの欠如である。

①　環の介護

櫻は環にリハビリにしっかり取り組んで病気を治してもらいたいと願っていることが読み取れる。語りでは、「リハビリしっかりやったほうがいいよ」(695)、「今日、リハビリの日だよ」(913)、「その話は今いいよ。さ、リハビリ行こ」(921)、「リハビリしないと治んないよ」(925)、「サクラこのために学校早退してきてんだよ！」(927)、「(リハビリに行こうとしない環

に）もういいかげんにしてよ！」(931）などがある。また環の介護を通じて、櫻が母の環に対して子どもに対するような態度で接している。「おしっこ自分で出来たねー（拍手）良かったね」(803)、「サクラの小っちゃい頃に、お母さんがサクラに言ってたやつ」(806)、「お風呂は、浴槽に入る時サクラが手伝って入れるし、体もサクラが洗うから一緒に入ろうね。これも小さいときと逆になったね」(810）のように、環が落ち込まないように気を遣うとともに、親子関係の逆転移が起こっていることが読み取れる。

環が櫻に精神的にも生活面でも依存が強く、語りからは「たぶん、それで大丈夫ってことになったら、お母さん、私が安心して離れちゃうのを恐れとるのかもしんない。なんかひどく落ち込んだり元気になったりの波がすごくてさ、離れたら、それが酷くなってしまわんかって心配もある。」(1101）という発話から、櫻は自分が親離れしてしまうことを環が恐れていることを認識している。「でもお母さんさ、私のためにすごく頑張ってくれて、それで倒れちゃったようなもんやからさ。なんかさ、銀行の通帳見たら、そういうのも全部分かっちゃったんだよね」(1103)、「自分とは違う人たち見てさ…羨ましいなって思ったり、嫌だなって思ったり、ほんとに嫌でさ。もう、いまの自分がすごい嫌になっちゃって。」(1107）と櫻は、環の病気が自分のせいであるかのように自責し、自分が介護して当然であると認識している。それなのに他者をうらやむような自分を責めていることがわかる。

わが国では近代化以降、家庭は聖域化し、「家族のことは家族で」という家族規範は強い。櫻も外部の人に助けを求めることがほとんどなく、環自身も、早めに病院を退院しようとしたり、外部の専門家やヘルパーなどでさえも家に入れることに抵抗感が強いように見受けられる。核家族のもつ排他性に関しては、落合（落合, 2019）が指摘するように、家族外の他者の排除によって、櫻が単独で介護する流れをつくってしまう。このためヤングケアラーとなった櫻はだれにも助けを求められず、単独で介護を担うことになってしまっている。

② 進学等の問題

環は自分のことで精いっぱいであるため、櫻の親離れは恐怖の対象であり、東京への進学に終始反対している。進学に関しての親娘の意見調整も棚上げ

されたままでとなっている。

加えて、作中からは、櫻は環に比べてそれほど自己主張するほうではないことが見て取れる。環からなにか悩み事があるのではないかと再三問われ、櫻は「あのさ……美大に行きたい……んだけど……」（156）とようやく切り出している。進路については環が近くの女子大を勧めると「サクラがやりたいのは美術」（160）と言い切っており強く希望している。櫻には自分の近くにいてもらいたいと強く主張する環に対し、「サクラが決めてもお母さんがいつもひっくり返すんじゃん！」（170）と語気を強めている。櫻は自分の進学への意思を持ちながらも、なかなか親にきいてもらえる状況にないことで悩んでいる。

③　サポートの欠如

父親の紘一が不在のため、実質的に櫻が環の介護を単独で担っている状態である。紘一については環から紘一を追い出しているため、映画では後半になるまで、紘一とは連絡がとれず、いつ戻ってくるのか不明である。紘一が帰ってくるまで櫻は、環の介護を単独で担っている。自分自身の学校生活、勉強、美術部の活動、友人関係、大学進学のことは後回しになりがちとなっている。また頼れる親戚などが近隣にいる様子もなく、インフォーマルサポートネットワークは非常に乏しい。

以上みてきたように、ストレス認知は家族成員間で異なる場合が多く、環と櫻のストレス認知も異なっている。このため家族全体への支援と同時に、家族成員それぞれの視点に寄り添った個別のサポートが必要になってくる。

４．家族危機への対応

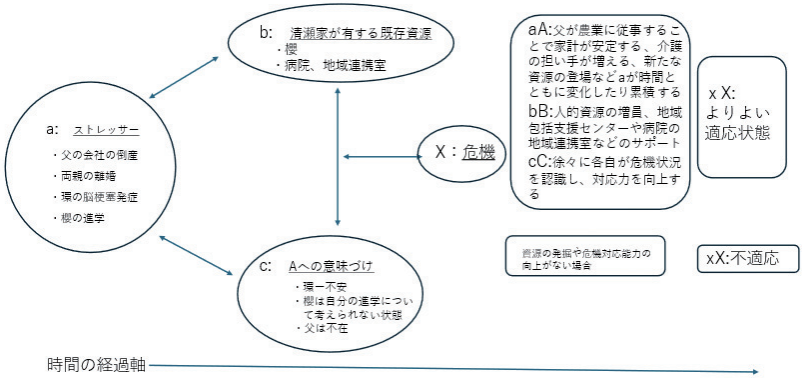
以下、危機後段階を中心に考察する。図１では、ABC-X原型が危機前段階→危機段階→危機発生後段階と右に行くにつれ時間の変遷を表し、時間経過に連れて状況や困難、困難への対応が変化していくことを表している。危機後段階には、危機段階にはなかった新規資源が登場する場合もある。新規資源の登場により、家族の危機処力も変化し、認知にも変化が生じ、それらのさらなる相互作用によって、よりよい適応状態にも変化することもある。

新規資源が見つからず、既存資源の疲弊によって、不適応に進む場合もある。清瀬家の家族危機について分析する。

a．ストレッサーは、危機前段階では父の会社の倒産、両親の離婚、櫻の進学問題、危機段階では環の病気発症などである。

b．資源としては、①個人の能力的資源、②インフォーマルサポート、③フォーマルサポートの３つである。①個人の能力的資源として、体力的資源、精神的資源、知識・技能、経験、能力などがこれにあたる。環（母）は脳梗塞を発症し、麻痺やしびれ、ろれつが回らないなどの言語障害を発症していることがわかる。体力的資源が損なわれ、精神的にも突然の発病によって不安定になっていることがうかがわれる。仕事にすぐには復帰できない場合には、技能や能力なども総合的に判断して、環自身の持つ資源は大きく損なわれている。②インフォーマルサポートとして、家族内の役割の担い手や相互に助け合えるか、そのサポート力、良好な関係性が保たれているか、集団としての凝集力などがこれにあたる。核家族の清瀬家の場合、両親は離婚し、父とは連絡がとれない状況にあり、脳梗塞の母親を日常的にサポートしているのは櫻（娘）のみである。母方の祖父母はおらず、父方の祖父母も遠方で、頼れる親戚はないため、インフォーマルサポートは乏しく、母子は孤立している。③フォーマルサポート（行政や医療機関などの専門的サービス）としては、入院中には医師や看護師などの医療の専門スタッフのサポートがある。その後も地域医療支援センターなどの相談サポートなど利用することで支援が広がっていく可能性がある。

図２　清瀬家の危機モデル



二重ABC-Xモデル
（Muccubin,h,Patterson.j,1983）をもとに栗山が修正加筆

上記の図では、【a. ストレッサー】+【b. 資源】+【c. 認知】の相互作用によって【X. 危機】の現れ方に違いが生じる。二重 ABCXモデルにおける危機後の変数には、初期のストレスに加え、日常的にそれらのストレスが積み重なっていくと考える。そのストレスは時間を経るにつれ慢性化し、家族関係の悪化にも転じやすくなる。清瀬家の場合、父親といつまで連絡がとれないのかなどの不安定要素もあるだろう。それに加え、環本人の職場復帰にかかる時間はいかほどか、もし復帰できない場合には職を失い、経済的に困窮していく可能性もある。家族が貧困状態に陥れば、櫻の進学は不可能になり、櫻が働き手になる可能性も生じる。

危機にある家族は時間経過の中でストレッサーが累積し、その都度対応する必要性が生じる。対応できずストレスが山積していく場合に、困難が過重となり、不適応に至る場合がある。不適応によって家族の解体につながる。一方で、家族内外で危機に対応しうる資源がどれほどあるかによって危機の増幅を回避することは可能である。既存のサポート資源に加え、新規のサポート資源の導入が家族危機の好転材料となる。危機に直面しその危機に対応することで、次に新たな危機が生じても以前の危機の経験に学び、危機対応能力を向上させていくことで家族機能は維持し続けることができる。

５．よりよい適応状態に移行するためには

さいごに課題として、①ヤングケアラー本人の自覚を促すこと、②教育現場における人的資源の充実とサポートシステムづくりの２点を挙げる。

①　ヤングケアラー本人の自覚を促す

ヤングケアラー支援の大きな障壁となるものとして、ヤングケアラー本人の自覚がないということがある。必要なサポートにアクセスするためにもまずは自覚を促す必要がある。清瀬家が危機を経てよりよい適応状態へと移行するためには、ヤングケアラーである櫻がヤングケアラーであることを自覚し、適切な支援を他者に求める必要がある。そして、物理的・人的サポート、精神的サポートを得ることが必要である。作中では、櫻はSNSで本音をつぶやいたりして、周囲の精神的なサポートや助言を得ている。SNSは全国に点在するヤングケアラー同士が地域を超えてつながることができる。近年ではVRチャットやクラスターなどのメタバースコミュニティでは、アバターを介して他者と交流することができる。メタバースコミュニティでは利害関係なく、他者の評価を気にすることなく、雑談することができるため、自己開示しやすい。また時間や空間の制限を受けずに複数の人物との会話が可能である。いわば、井戸端会議の場所づくりである。必要な社会資源へのアクセスのためにも、こうしたメタバースコミュニティを用いて、ヤングケアラーのピアサポートの場づくりをしていくかが課題と言えるだろう。

②　教育現場における人的資源の充実とサポートシステムづくり

ヤングケアラーに周囲が気づくきっかけとして「ケアのために部活をやめた」、「ケアのために学習が疎かになった」、「ケア疲れのために授業中に居眠りをする」などのように生徒が学校で自らの危機に関する情報を発信する場合が多い。しかし教員は過剰な業務負担に日々追われているため、生徒が発信する情報に気づけたとしても、なかなか対応することが難しい状況にある。学校自体も家族と同様に閉鎖的な環境になりやすく、学校内のことは学校内で解決しなければという風土もあって、生徒の危機に関する情報が学校内に留まりがちである。生徒からのSOSを教員が適切にスクールソーシャルワーカーや、スクールカウンセラー、教育委員会の指導主事などを通じて外

部の支援機関につなげ、生徒への支援につなげていく仕組みづくりが必要である。そのためにはまずは教員にヤングケアラーに関する知識を持たせるための研修の実施、学校内にコーディネーターを置くなどが考えられる。コーディネーターとしては、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、養護教諭、教育委員会の指導主事などが想定される。学校内でヤングケアラーに気づき、支援機関につなげ、その後も生徒を気にかけていく３ステップの組織体制づくりが急務である。

謝辞

本研究にあたって、祝大輔監督に映画「猫と私と、もう１人のネコ」を題材に家族危機を分析することについて許可をいただきました。深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

映画「猫と私と、もう１人のネコ」（2024）祝大輔監督、阿久根知昭脚本、製作イメージフィールド福岡、配給トリプルアップ

Hill, R.（1958）Social stress on the Family: Generic Feature of Families under Stress, *Social Casework*, 39:139-150.

McCubbin, H. I. and Patterson, J. M.（1981）*Systematic Assessment on Family Stress: Resources and Coping*, University of Minnesota, p.9.

石原邦雄（2008）『改訂版家族のストレスとサポート』財団法人放送大学振興会.

斎藤真緒・濱島淑恵・松本理沙（2022）『子ども・若者ケアラーの声からはじまる』クリエイツかもがわ出版.

小島操子（2024）『看護における危機理論・危機介入』金芳堂.

仲田海人・門田行史（2024）『ヤングケアラーの理解と支援』学事出版.

落合恵美子（2019）『21世紀家族たちへ-家族の戦後体制の見かた・超えかた』有斐閣選書.

子ども家庭庁ホームページ　https://www.cfa.go.jp/policies/young-carer/（2024年12/31閲覧）